

【排泄シンポジウム報告】

神奈川県頸髄損傷者連絡会 瀬出井 弘美

先に開催された四国大会におきまして、ストーマ（人工肛門）に特化した排泄シンポジウムのスピーカーとしてお話をさせていただきました。

シンポジウム後は、グループディスカッションという形で、会場に参加されていた他の3名のストーマ造設者の方を中心に集まり、ストーマについて質問等を受けたり、話し合いの時間が持たれました。私のグループは、皆さん概ね良好な排便管理をされていらっしゃる方が多く、ストーマを思案、検討中という方はいらっしゃいませんでした。

頸損者にとって排泄は、一生お付き合いする共通の重要な悩み多き問題です。私は、4年近く悩んだ末に人工肛門という手段を最終的に選択いたしました。だんだんと増えてゆく刺激性下剤の量、いつの間にか育ってしまった痔核……一時は痔を治そうかとも考え肛門科専門のクリニックも受診しましたが、痔を治したところで果たして根本的な解決につながるのか……？

私が人工肛門に踏み切り、腹をくくれたのは、両親の高齢化でした。もし両親に何かあったとき、「今日は排便日」と言っている場合じゃないだろうというのが、一番大きかったように思います。

人工肛門にしてよかったか？ どんな方法にも、メリット・デメリットがあるとしか正直なところ申し上げようがありません。お腹の張り、吐き気はなくなりました。下剤も不要になり、痔は、肛門を使わなくなったので自然と小さくなりました。ガスも（お小水も）良く出る。失禁の心配はない。漏れや臭い、肌トラブル、パウチ交換等のケアの問題を除けば人工肛門は楽だと思いません。体調自体は、良い方へ改善されたといえるでしょう。

しかし、ストーマにした今でも、肛門を使用した通常の排便方法で管理していけるのであれば、

それにこしたことはないと思っております。それには、介護力の問題も関係してくるでしょう。ただ、今後、特に高位脊髄損傷者の排便管理に人工肛門は、選択肢のひとつとして確実に提案されるような気がいたします。

シンポジウムの際にもお話をさせていただきましたが、私はストーマに“カメコ”と名付けて毎日話しかけております（笑）。自分の腸なので身体の一部なのですが、別の生き物（？）のようにも感じるからです。「自分のお腹に肛門がある」……ストーマを愛おしいものとして好きになれるかも、造設の大切な決断要素かもしれません。

私の周囲でも、ストーマでの排便管理をされていらっしゃる方たちが増えましたが、私でお役に立てることがありましたら何なりとご相談に乗りますので、いつでもご連絡いただければと思います。

スピーチと一部重複いたしますが、造設の決断から検査、手術、退院後のことまでは、四肢マヒ者の情報交換誌「はがき通信」157号にも掲載しておりますので、ご参考までに。（「はがき通信」で検索できます。瀬出井の連絡先のメールアドレスも掲載してあります。よろしく願いいたします。）

